様式２

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：歴史と文化
部会長名：百橋　明穂
作成者名：市澤　哲

概要（2000 字）

第一に授業内容について。「歴史と文化」教育部会の授業内容は、シラバスから伺えるとおり、バラエティに富んでおり、教員数相応に歴史を学ぶメニューを幅広く受講生に提供できていると考える。対象とする時期や地域も多様で、高校までの歴史と大学の歴史研究の違いが、シラバスを通してよくわかる編成になっている。また、各教員は最新の研究成果に基づいて授業を行っており、教育目標を達成するに十分な水準をもっている。

第二に授業の進め方について。これまでの部会内の情報交換で、「歴史と文化」の授業を受講した学生の多くは、高校までと同様、大学の歴史の授業も暗記科目だと考えている場合が多いこと、また、機械的に授業振り分けが行われた１年前期の場合、高校で日本史や世界史を履修していない学生が、単位が取れるのか不安に駆られることが少なくないことが確認され、このような学生の状況が授業の前提条件であることが共通認識となっている。したがって、学生に対して大学の歴史は単に知識の有無を問うものではなく、歴史的なものの考え方を学ぶことを目標とすることを丁寧に説明し、予備知識が乏しくとも一定程度の自習で授業内容が理解できるよう、説明の手順を考えるなどの工夫が科目ごとになされている。具体的には、パワー・ポイントに画像を多く盛り込み、受講生の興味を高めること、適宜小テストを行い、受講生の理解度を確認すること、授業中に独自に授業アンケートを行い、授業の改善点を明確にすること、などの取り組みが積極的に行われている。ただし、パワー・ポイントを利用した場合、複数の画面を映し出すことができないため、年表や地図などの時間的、空間的な基礎情報と個々のトピックを結びつけることが困難な場合がある。新しい教育機器を活用する一方で、ハンド・アウトされた資料や、板書を効果的に利用することにも配慮がなされている。

第三に自学自習、単位の実質化の問題について。「歴史と文化」教育部会の授業の場合、授業内容に対する理解を深めるには、授業と関連する図書を読むことが最も重要である。授業では、比較的容易に読める参考文献の紹介を随時おこなうなど、自学自習の取り組みを促すとともに、参考図書の募集に積極的に応じ、その条件作りにも努めている。しかし、高額な視聴覚資料もふえており、図書充実をどのように図るかは、今後の課題である。また、クラスサイズが大きい場合、１冊の図書ではとても対応できないことにも、配慮が必要である点は、これまでも指摘されているとおりである。

最後に問題点をあげる。一つは１年前期の教養原論を機械的な割り振りについてである。先にも述べたように、「歴史と文化」の諸科目への取り組みのモチベーションがかなり低い学生がいることは否めない。やっと高校で嫌な歴史と別れたのに、なぜ大学で強制的に学ばされるのか、という疑問の声も聞かれる。このようなネガティブな姿勢を授業によって変えることができないわけではないが、そういう学生の存在に授業内容や進行が引きずられることも起こりうる。この形式が問題にされて久しいと思うが、そろそろ本格的に改正すべきではないだろうか。

二つ目として、TA の時間配分の少なさがあげられる。教養原論の場合、大教室が多く、機材の操作や教材の配布、出席カードや小テストの整理など、手間のかかる仕事が多く付随する。とくに、小テストやアンケートなど学生とのコミュニケーションを密にする作業は、大教室なればこそ必要であるが、作業量は比例して大きなものとなる。現状では配分された時間数を授業で割ると、１授業あたりわずかに２～３回分しか配分で

きない。TA をより実質的な授業補助として授業に参画させることも含め、充実した制度にすることが望まれる。
　三つ目として、クラスサイズの問題がある。これも毎年のように問題になっている。授業時間中のアンケートや小テストで受講生の習熟度を測りながら授業をするにしても、200 人に近い受講生の要望にあわせて授業を進めていくことの困難さは明らかである。また、公式の授業アンケートの結果において、クラスサイズと満足度の相関関係がどうなっているかなど、適切なクラスサイズについてとりあえずの作業として、手許のデータ分析などが必要であろう。

様式２（続き）

項目・観点ごとの記述

基準５　教育内容及び方法

５－１【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ，それに基づいて教育課程が体系的に編成されており，その内容，水準が授与される学位名において適切であること。】

５－１－③：　教育課程の編成又は授業科目の内容において，学生の多様なニーズ，学術の発展動向，社会からの要請等に配慮しているか。

（観点に係る状況）
多様なテーマが設定され、現代的関心への配慮も払われており、諸要請にこたえる教育編成、内容になっている。

根拠
　シラバス、自己評価の「授業概要」部分

５－２【教育課程を展開するにふさわしい授業形態，学習指導法等が整備されていること。】

５－２－①：　教育の目的に照らして，講義，演習，実験，実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり，それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

（観点に係る状況）
クラスサイズや TA の雇用状況から考えて、講義以外の授業形態はなかなかとれない。組み合わせを考えるなら、抜本的な改正が必要である。なお、講義に関しては適切な指導法がとられている。

根拠資
　シラバス、授業中の配付資料

５－２－②：　単位の実質化への配慮がなされているか。

（観点に係る状況）

適宜、予習復習の指示や参考文献の紹介がなされている。個々の学生のチェックは、クラスサイズの大きな授業では実施が難しい。

根拠資料
シラバス、授業中の配布物、パワー・ポイント、試験問題

５－２－③：　適切なシラバスが作成され，活用されているか。
（観点に係る状況）
シラバスは適切に作成されている。

根拠資料
シラバス

５－２－④：　基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。
（観点に係る状況）
一人一人の受講生の習熟度を測ることは困難であるが、質問を受け付ける体制があることはシラバスで示している。また、一部の授業で授業中、学力不足の学生の調査を兼ねたアンケートが行われている。

根拠資料
シラバス（質問歓迎の文言・参考文献の指示)、アンケート

５－３【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ，それに照らして，成績評価や単位認定，卒業認定が適切に実施され，有効なものになっていること。】

５－３－②：　成績評価基準が策定され，学生に周知されており，その基準に従って，成績評価，単位認定が適切に実施されているか。
（観点に係る状況）
適切に行われている。評価基準等は、試験の場で口頭で補足されている場合もある。

根拠資料
試験問題と答案、出席簿

５－３－③：　成績評価等の客観性，厳格性を担保するための措置が講じられているか。
（観点に係る状況）
適切に行われている。

根拠資料 　試験問題と答案、出席簿

基準６　学習成果

６－１【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして，学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について，学習成果が上がっていること。】

６－１－②：　学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して，学習成果が上がっているか。

（観点に係る状況）

アンケートによる学生の評価は高く、効果が上がっていると判断される。ただし、アンケートの回収率が低い点は問題である。

根拠資料 　学生授業評価集計結果

基準７　施設・設備及び学生支援

７－１【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され，有効に活用されていること。】

７－１－④：　自主的学習環境が十分に整備され，効果的に利用されているか。

（観点に係る状況）

自主的学習に関してはよくわからない。ただ、教育環境については、設備等について、いくつかの問題が指摘されている。

根拠資料 　自己評価の 7-1-①、7-1-②

７－２【学生への履修指導が適切に行われていること。また，学習，課外活動，生活や就職，経済面での援助等に関する相談・助言，支援が適切に行われていること。】

７－２－①：　授業科目，専門，専攻の選択の際のガイダンスが適切に実施されているか。

（観点に係る状況）

現在の環境の中で、オフィス・アワーの告知や、メールでの応答など、できることに取り組んでいる。

根拠資料 　オフィス・アワーの告知、メールの応答記録、アンケート

７－２－②：　学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており，学習相談，助言，支援が適切に行われているか。
また，特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり，必要に応じて学習支援が行われているか。

（観点に係る状況）

オフィス・アワーや、授業中のアンケート、メールでの応答により、学習支援の必要性をキャッチし、対応している。しかし、クラスサイズの問題解消やＴＡの十分な配置が実現すれば、より適切な対応がとれると考えられる。

根拠資料 オフィス・アワーの告知、メールの応答記録、アンケート